

岡田の山車祭り詳説

一、はじめに

知多半島では、多くの地区で山車祭りが行われている。

近年、岡田では、他には残されていない三人遣いの人形戯が相次いで復活された。四月に行われる祭礼には三輛の山車が曳き出され、それぞれの山車でからくりと三人遣い、二種類の人形戯を行っている。

岡田で山車と呼ぶようになったのは、昭和四十年頃からで、それまでは祭礼車(くるま)(御車)と呼ばれていた。

二、岡田の祭り

岡田まつりは、八月二日 かぼちゃ にしめに 栗ごわい。

これは、かつて「岡田の祭礼の時に唄われた伊勢音頭の歌詞の一節である。江戸時代、山車が出る岡田の祭りは八月二日であった。しかし、明治四年(一八七一年)、氏神を神明社と改めたが、祭礼は長年親しんだ白山宮に対して行われた。そして、時勢の変化により、明治二十年(一八八七年)、祭日を八月十六日に変更して神明社の祭礼とした。さらに明治三十年(一八九七年)、祭日を四月十六日に変更した。

各地で行われる山車祭りの多くは、山車を神社境内に曳き込んでから、からくり人形など芸能を奉納するところが多い。

しかし、岡田ではその場所だけ広がっている大門と呼ばれる、大路が舞台である。それは、神社が丘陵地に祀られているのでそこまで山車を曳いて行けないからだ。元来、鎮守である白山宮と山車祭礼の関係が深かったからである。

かつて、祭礼の日程は次の様に決められていた。

四月十五日	シンガク(試楽・笹神楽)
十六日	ホンガク(本楽・本祭り)
十七日	山おろし
十八日	伊勢参り

現在は、四月十六日に近い日曜日が岡田の祭礼である。土曜日はシンガクと呼ばれる宵祭りだ。今でも午後七時に、笹提灯を持って囃子を奏しながら神明社と白山宮に参詣する。山車を曳くことはない。日曜日はホンガク(本楽・本祭り)である。午前九時、山車を大門へ神明社方向に集結させた後、各組が神明社と白山宮へ幟を立てに行く。さらに両社へ長い竹竿の先に幣を付けた御幣を先頭に、各組が囃子を奉納するため練っていく。先車を始め、前台で三人遣いの三番叟を先に演じ、後下木偶、上木偶が演じられる。神明社では、十時から大祭の神事が始まる。

午後一時、山車の方向を替える捻廻しが行われる。それまで神明社を向いて一列に並んでいた山車を、今度は反対の白山宮の方向にする。午後二時三十分、白山宮に奉納するため午前と同じ順で演じられる。午後四時三十分、各組の会所へ戻る曳き別れとなり、大門からそれぞれの会所へ囃子の音と共に帰っていく。朝立てた幟はそれまでに納めに行ってくる。午後五時三十分、山車は鞆蔵(さやぐら)に納める。里組では、現在でも山車が鞆蔵に入ると、幣納めと言って三番叟を行う。

本楽の翌日、月曜日が山下ろしで、山車を解体してから、それぞれの部品を箱の中へ納め蔵に収容する。また当日、朝早くから中組と里組の村方役員は、車で伊勢参りに出掛けるのである。最近では道路事情が良くなったので、山車の部品が蔵の中へ収まる昼前頃には戻ってくる。村方は、御土産として赤

福餅を買ってくる。奥組だけは、今でも山下ろしが終わった午後、村方が揃って一泊で伊勢参りに出掛けている。

三、岡田の山車

岡田の祭りに、いつから山車が登場したのか定かではない。ただ、里組の山車内部の柱に「己前車元禄二己歳出作之所破却中頃断后…」と刻されているので、元禄二年（一六八九）には、山車が存在していた事は明らかだ。それが山車祭りの始まった年であるかは判らない。しかし、その元禄二年、岡田の祭礼に山車が登場したとするならば、その由来の多くがはっきりしない知多半島内においても貴重な資料である。

岡田の山車構造は、基本的に、知多半島地方で多く分布する知多型と呼ばれるものである。すなわち、二層造で唐破風の屋根を四本柱が支え、正面の高欄下にも唐破風があり四本柱を拵える壇箱、そこを岡田では前台と呼び、やはり彫刻で飾られている。車輪は一木四輪の外輪で、そこには格子の輪掛があり、ここ岡田では、レンジと言う。知多型の車輪は内輪なので、それは名古屋型の山車の影響と思われる。中組は両側に格子を備える通常の輪掛けだが、奥組と里組は正面と後部も格子を囲む。

正面高欄も両側からは、「標(だ)具(し)」と呼ばれる造花を飾りつけた竹が前方に左右に振り分けて垂れ下がり、(知多市誌 先年氏神日長神社遠路故白山ヲ氏神ト奉リ…。森村の出郷で有った岡田西部の人々は、前記の理由で白山宮を村社とし、日長神社の行事として割竹〈四～五尺〉に造花を付けた〈花〉を祭礼の日、現在でも日長の人々は神社に奉納する。これを岡田の人々は車の正面高欄の上から前台の屋根の左右に垂れ下がる様に付ける。「標具」と呼ぶ此の花を付けるのは、知多半島では岡田だけである。

〈昭和初期の山車の写真を見ると日長の花とほぼ同形である〉。四月十六日が岡田の祭礼の頃、日長は四月八日であった。)中組と奥組には時の花である桜枝も見られる。後面の高欄両隅には三輛共に松枝があり、山車本来の依代的な面影を残している。また、奥組では上山の屋根下に庇のような障子屋根が取り付けられている。これは、上木偶を八月の陽射しから守る為のものである。山車後方には、竿の先へ吹き流しを付けた馬毛の梵天(一対)と見送り幕(奥組は追幟と呼ぶ)も見られる。

岡田の山車の特色は、前台に脇障子が存在しない事と、上山(岡田では屋形と呼ぶ)の四本柱が非常に長い事である。それらの特色は、人形劇を演じる事と大きな関係がある。屋形は、からくり人形、前台は三人遣いの人形を行う場所で、前者は上木偶・上人形、後者は下木偶・下人形と呼んでいる。

この山車は、丘陵地にある物にしては少し大きすぎるように思われる。しかし、明治初年まで山車の部材は、大門まで運び、そこで組み立てと解体の作業を行い、山車を曳く事はなかったと言う。(奥組の車には曳き綱を取り付ける穴は無い。しかし、平成の大修理に前格子を改良し綱口を開けてある。)それは、岡田の郷中を通る道が大変狭く、山車を曳く幅がなかったし、それだけの橋もなかったからである。

屋形の高さは、調節することができる。四本柱を一つの枠の上に乗せ、それを山車全体の中で昇降させて行く。中組と里組は滑車によるからくり仕掛けであるが、奥組は人力で持ち上げている。この奥組の方法は古い様式を伝えていると思われる。

大門では、山車を縦に並べ、毎年その順番は交替する。先頭の車を先車(せんしゃ)と呼んだ。先車は、責任ある祭礼進行の当番である。その先車の組の祭礼日における天候が山車名となっている。すなわち、奥組は風車、中組は雨車(水車)、里組は日車と呼ばれている。

先車には、前台に向かって右の柱に「例年・先車」を記された指替板を懸けている。その札は、祭礼が終り、曳き別れる時に大門で、翌年の先車当番の組へ渡すのである。その札裏に、宝暦六年（一七五六）板が損じたので天明三年（一七八三）に新調した事が記されている。言い換えると、宝暦六年には、三組が山車を所有していた事を物語るのである。

現存する岡田の山車は三輛とも、その本体内部の柱に刻銘がある。古い順に並べると次の様である。

（中組）天保十年 亥六月吉日 造作仕 棟梁 藤田佐右エ門 藤原雅房

（里組）己前車元禄二己歳出作之所破却中頃断后正徳四年歳造立之 又延享二年午歳小車而新造作之于今又嘉永五壬子歳造之 大工匠藤田佐右エ門 藤原雅房

（奥組）時于文久元辛酉六月下旬 當所棟梁藤田佐右エ門 藤原宗雅造之

つまり、中組は天保十年（一八三九）、里組は嘉永五年（一八五二）、奥組は文久元年（一八六一）、それぞれ現存する山車の本体部分が建造された事が判明する。その大工は三組共、同じ岡田の藤田佐右エ門である。中組と里組は藤原雅房、奥組は藤原宗雅とあるので、恐らく代変わりしたものと思われる。

○里組の山車は、先の刻銘から山車の変遷を知る事ができる。すなわち、元禄二年（一六八九）に出来た山車が廃車になった後、しばらく山車は無く、正徳四年（一七一四）に再興され、さらに延享二年（一七四五）に小車を新造した。そして嘉永五年（一八五二）に製作したものが現存するものである。このように見ていくと現在の山車は四代目と言う事になる。これらの柱の刻銘は山車全体の製作年ではなく、あくまでも山車本体、すなわち木組の建造年である。

○中組の前台裏には、次のように記されている。

大工當所

大工佐右エ門 竹内 〇 〇

竹内利助

木挽小倉邑 和平

乙蔵

尾州名古屋

彫物師

瀬川治助

鍛那子師

名古屋橋町

河内屋甚四郎

塗師大野 弥兵衛

露色師 名古屋 平兵衛

箔師 名古屋 利八

繪師 名古屋 善吉

于時文化十一歳

甲戌八月吉辰出来

中 組

すなわち、中組の前台は文化十一年（一八一四）に製作された事が明らかである。大工を初め山車製作に携わった様々な職人の名なども記されている。彫刻は名古屋の彫師、瀬川治助重定である。

○奥組の屋形の棟木には、延享四年（一七四七）七月の刻銘がある。さらに、「名古屋山王前 福田屋吉左エ門、塗師 當所與三吉エ門二男 與助」と記されている。この様に中組でも同様だが、名古屋と地元の職人が協力して山車製作に係わったのである。また、奥組には前台柱や屋形長押等の箱書に享和二年（一八〇二）の銘も存在する。

先に紹介したように、里組の山車には嘉永五年（一八五二）の刻銘が存在するが、ここの山車は度々、造り替えられている事その刻銘からも明らかである。建て替える前の会所に山車の一部が使われ、某家の一角には以前の山車の部品が積まれていた等と語られている。また、享和元年（一八〇一）銘のある箱も保存されている。

里組の前台に「尾州奇雲堂 瀬川重光作」、前台唐破風裏には、「文久三癸亥 七月出来

尾州奇雲堂 瀬川重光 治助作」とあるので、前台とその破風の彫刻は恐らく文久三年（一八六三）に名古屋の彫刻師、瀬川治助が製作したと思われる。さらに、元治元年（一八六四）と慶応四年（明治元年・一八六八）などの彫刻箱もあるので、現在の山車が完成するのは、明治元年であろう。

彫刻で最も目につく所は前台である。その主な意匠を次に見る事にしたい。前台の一番古いのは中組で、文化十一年（一八一四）に、瀬川重定が製作している。それは、両端に力神、中央は獅子である。ついで、文久元年（一八六一）の奥組で七福神その作者は、同年の「御車諸入用控日記帳」によると、

一、 金貳拾七両 彫物師 長兵衛

と記されている処から、「長兵衛」は名古屋の彫物師、早瀬長兵衛の事だと思われる。さらに、安政二年（一八五五）起しの「車造作入用日記」により、同年から作業が始まっている事が知られ、三月（安政三年か）に長兵衛へ手付金壹両が支払われている。最も新しい里組は、文久三年（一八六三）、瀬川治助の作で、その意匠は、向かって右端は竹、左端が梅、中央の右は虎、左が龍である。これらは、全て素木の彫刻である。

この様に、岡田の山車構造は知多型であり、度々改造が繰り返されてきた。しかし、前台に脇障子が無く、屋形高欄下の組物が簡素な事など、部分的に知多型の古形を残している。それは、屋形でからくり人形、前台は三人遣いの人形、この両者の人形劇を伝えるために山車形態も古様を保ったのであろう。

四、 岡田のからくり人形

屋形の四本柱内にはからくり人形を乗せている。それを岡田では上人形、上木偶と呼ぶ。奥組は文字書と樹上倒立、中組は綾渡り、里組は人形芝居の平治合戦である。これらの人形は一時、山車の上にも飾られる事さえなかったが、今では修復され、祭礼の時に神前で奉納されるようになった。

1 奥組（樹上倒立・文字書）

奥組のからくり人形は、木の上で倒立する唐子（樹上倒立）と文字書である。この様に一輛の山車の上からからくり人形が二種類も乗せられている所は極めて少ない。前者を奥組では梅木偶と呼び、若い衆制度が存続した頃までは長男しか触る事が出来なく、特に重要視されていた人形である。

樹上倒立のからくり人形は、屋形の四本柱前で行われる。すなわち、倒立する木の幹が四本柱前に立っているからである。このからくりは、唐子が差し金と呼ばれる仕掛けのある棒によって倒立し、右手に持った桴で梅の木に吊るしてある太鼓を叩く。普通、この形式の樹上倒立のからくり人形には、外にもう一体、太鼓を叩く唐子が付属しているが、ここ奥組では見られない。

からくりの演技が始まるまで、唐子の人形は台上に立っている。その時、差し金は人形の中心を通っ

ている。人形が動き出すと、今度は左手に木を着き、それは木から差し金に差し替えるのであるが、そのタイミングを逃すと人形は落下してしまう。二本の差し金を使い分けるのは、息の合った同士の腕の見せ所である。

この木の幹にはゼンマイと呼ばれる装飾歯車があり、そこには時計仕掛けが取り付けられている。からくりの演技を始める前に歯車を回転させ、見ている人々に、人形はこのゼンマイ仕掛けによって動いていますよ、と強調する舞台装置なのである。

文字書のからくり人形は、幸福木偶と呼ばれ屋形の四本柱の中に乗せられている。これは蓮台に乗った唐子が、右手に持った筆で文字を書くものである。蓮台は飾りのある台で、その向かって左にはこの台を回す棒を唐子が握っている。蓮台は臼の様に山車の中を一回転するので、その唐子を粉挽き木偶と呼ぶ。

蓮台には周囲を櫛のように短い丸い棒が巡り、蓮台が回る時、この上を歯車が食い込んで回転していく。その歯車も時計仕掛けのある装飾歯車でガリガリと音を立てて回る事で、人形が動いていると人々に思い込ませたのである。

文字を書く唐子は、蓮台の上に立っているが、人形の両側には柱があり、上部に矢車と歯車がある。これは文字を書く前に粉挽き木偶が握っている棒を回して蓮台をセリ上げ、その時に回転するのである。文字は蓮台から伸びている細長い丸棒の旗に紙を挟んで書く。旗に赤いギザギザ模様で囲んでいる。筆の墨は書く度に係が付け、文字書唐子の操作は、人形の右手に連結した棒を下で人が操る事により文字を書くのである。

梅木偶の製作年代は定かではない。ただ推定できる資料は存在するので後で考える事にしたい。まず確かな資料の存在する文字書の人形から先に見ていきたい。

文字書のからくりは慶応三年（一八六七）に製作されている。それは慶応三年卯四月吉日の「普請人形入用記」により明らかである。

上人形諸入用覚

名古屋

浅野屋新助

一金拾貳両也	文字書式人 人形仕立 臺直し代
一金壹両貳分	人形壹人 直シ賃
一金拾貳両也	ぬり筒 金もの 仕立代 箱代

(別紙)

寅八月九日

一金三両 人形 手附金

とある。つまり名古屋のからくり人形師、浅野屋新助が十二両で製作したのである。ここに「文字書

式人」とある所から、その人形は文字書唐子と蓮台回しの二体を指すのであろう。

さらに「臺直し代」と記されている蓮台が現在の蓮台であるならば、それを修理していることになる。すると奥組の山車に始めて文字書のからくりが乗ったのは慶応三年ではないかも知れない。それまでは梅木偶が乗って居たとも言われて居る。また別紙に「寅八月九日・一金三両也 人形 手附金」と書かれたものがあり、人形が出来た前年の慶応二年（一八六六）、その製作を依頼し手附金を支払っている。

慶応三年の「普請人形入用記」の中で一つ気になる事がある。それは「一金壹両貳分 人形老人 直し賃」とある箇所、人形を一体修理していることである。はたしてその人形はどの人形を指すのであろうか。一体とある処から、奥組の山車にもう一つ乗っているからくり人形、すなわち梅木偶の唐子を指しているかも知れない。

ところで、奥組の文化九年（一八一二）改めの「定法捻代記」に人形を造り替えた記事が見られる。それによると、

（天保三）

辰年

一 上人形作替之せつ惣入用

金拾五両也

此内金七両貳分村方 若衆へ遣ス

右作者名古屋古渡り玉屋庄兵衛へ作

と記され、天保三年（一八三二）に名古屋のからくり人形師、玉屋庄兵衛が製作したと言うのである。残念ながら人形の内容までも記されていないが、それは先に見た記録と合わせて考えれば梅木偶の可能性は高い。平成十年岡田公民館で講演された玉屋庄兵衛（九代目）さんは、梅木偶を見て五代目の作品と思う…と。

これら二つの上人形は、昭和三十年頃まで操られていた。しかし、人形が破損したこともあって途絶えてしまった。しばらく動く事もなかったが、ようやく、平成四年に文字書、梅木偶は平成六年、竹内雅二氏の手によってそれぞれ復活し現在に至っている。

2 中組（綾渡り）

中組のからくり人形は綾渡りである。四本柱内の天井に梯子状のものが吊ってあり、そこに綾棒が段違いに取り付けてある。その綾棒を唐子人形が上手に渡っていく。中組の人はこの人形を返り木偶と呼ぶ人も有る。その他、屋形正面の向かって右に小鼓打ち、左には締太鼓打ち、これら二体の唐子の囃子方が華を添えている。この様に中組には三体のからくり人形が屋形に乗せられている。綾棒は五本あり、その仕掛けは大きく二種類に分けられる。かぎホックの金具が付いた棒が回転するものと、棒の中央から突き出る棒が、人形の体内に入るものである。この二つの仕組みを交互に組み合わせることで、山車内の奥から前へ順に五本目まで人形を渡らせる。最後は奉納する神社名を書いた巻き物に吊り下がって終わるのである。動きとしては「手掛け」・「手離し」・「そり」の繰り返しにより人形は渡るのである。長い間破損した間々だったが平成四年に吉田 純一氏によって復活した。

糸は十七本あり、これを右手九本、左手八本に分けて一人で人形を操っている。かつて他に二本の糸があったので、本来は十九本の糸である。

綾棒が取り付けてある梯子状の装置の後面に装飾としてゼンマイに相当する歯車を組み合わせたものがある。さらに、先に紹介した締太鼓と小鼓、囃子を行う人形があることも他では見られない人形構成

である。

この綾渡りの製作年代は現在の処、手掛かりはない。同型のからくりとして名古屋市中区の戸田祭、五の割の山車が知られるけれど、その人形構造は全く異なっている。

3 里組（からくり人形芝居・平治合戦）

里組のからくり人形は数体の人形を使って人形芝居を演じるものである。その外題は「悪源太平治合戦」で、浄瑠璃に合わせて行われる。登場人物は次の五体である。牛若丸・喜平治・平清盛・鷲塚平内・烏天狗である。

上山の高欄には三本の樋が正面に突き出している。向かって右が平清盛、中央が少し長く出ている樋で喜平治、左は鷲塚平内である。平内は大回しと呼ばれる操作方法で、円を描いて動きまわる事ができる。樋の操作は広報から糸を引き、それぞれ二名で担当するものが多い。天井には人形操作でいう走線戯があり、それを里組では「吊し棒」と呼んでいる。糸の本数は、

牛若丸（十一本）、喜平治（十八本）、平内（九本）

平清盛（十六本）、烏天狗（七本）である。

山車の前台向かって右の柱外には「悪源太平治合戦 四之口」と配された木札をさげる。

次にからくりの見処を順に紹介する。

- ① 喜平治の着物が紺から赤白の格子に変わる。
- ② 義経が天井から走線戯で登場し、喜平治が右手を上げるとそこへ義経は下駄履きの右足を乗せる。義経は走線戯から離れ、下からの操作で動くようになる。
- ③ 喜平治の右手の上に乗ったまま義経は長刀などを回転させる。
- ④ 走線戯で進んできた烏天狗に義経は捕まり、持ち上げられ連れて行かれる。（喜平治から離れる）。
- ⑤ 平内が衣装を白衣から変える。
- ⑥ 喜平治が左手に持っていた扇を花に変えて回転させる。
- ⑦ 喜平治が左手で平内の背中を刺し、そのまま肩へ持ち上げぐるぐる回して山車外へ放り投げる。

- ⑧ 清盛が御堂、喜平治は小さい喜平治に変身する。これは人形がひっくり返ると全く別の物に変わる仕掛けである。

人形は浄瑠璃に合わせて操作されるが、この内、②と⑦の演技の時は独特な囃子によって操られる。前者は「うち」、後者は「ヒーリ・ドンドン」と呼ばれる曲である。

この人形芝居が里組でいつから伝わっているのか定かでない。「悪源太平治合戦」の台本奥書に「文政六年末初穂改之」と記されているので、文政六年（一八二三）以前からである事は確かだ。同様な平治合戦のからくり人形は、かつて知立でも行われ、人形の一部は残されているが、その構造や最後の変身内容などは異なっている。

里組のからくり人形芝居も、昭和三十四年（一九五九）を最後に暫く演じられることはなかった。竹内昭好氏によってようやく復活したのは平成になってからである。このことは昔に戻ると言う事である。

からくり人形が乗っている山車は、知多を始め尾張地方にはたいへん多く遺存している。しかし、里組の様からくり人形を数体登場させて人形芝居を演じてしまうものは、全国的に見ても知立から知多半島にかけて分布するだけである。現在でも山車においてからくり人形芝居を演じているのは、里組の他、知立市西町を始め、常滑市坂井と美浜町上野間（越智組・四島組）、このように合わせて五ヶ所であ

る。

岡田の山車祭り保存会 顧問 安藤英明
(当会登録会員)